

# Market Watch

三原淳雄の  
マーケットウォッチ

〈第104回〉

## 新興国の時代

経済評論家 三原淳雄



運用難に悩む公的年金が新興国への株式投資する方針を打ち出した。結構なことである。現行の公的年金の水準を維持するには4%強の利回りが必要だが、世界的なデフレ傾向で先進国の株価は低迷、債券市場はどこも限りなくゼロ金利に近い。

約117兆円の運用資金のうち約9%を外国株式で運用しているが、これまで先進10カ国に限定していた。それを新興国に広げようとする動きはむしろ遅すぎたと言ってもいい。上海市場などは20年前には存在すらしていなかった。その上海市場が時価総額で日本を抜いたとか言われるほどの成長ぶりだから、株式投資は成長を買うという原則から考えても、新興国への投資は大いに歓迎したい。

大昔の話だが、1971年にスイスで資産家然とした老婦人に話し掛けられ、聞けばアメリカ人で亡き夫が1960年代にアメリカで売り出されたジャパンファンドを買って残してくれたので、ヨーロッパの高級ホテルを泊まり歩いているとか。

当時は日本も新興国、ジャパンファンドが売り出されたころの日経平均はまだ500~600円、為替は1ドル360円だったのだから、その後もこのご婦人の老後はジャパンのおかげですばらしいものになったはずである。

### 兆から京へ

折からゴールドマン証券が長期的な世界の株

式市場の予測を出してきた。

いまから20年後の2030年には世界の株式市場の時価総額は145兆ドル、いまより100兆ドル以上も増え、約1京3000兆円になる予測をしている。いよいよ京の時代になってきた。

予想通り主役は新興国であり、現在14兆ドルの時価総額は2020年には37兆ドル、そして2030年には約80兆ドルと世界のシェアの55%以上に達するとされている。対して先進国のそれは、現在の30兆ドルが2020年には46兆ドル、2030年には66兆ドルとなるが、新興国の80兆ドルには水をあけられることになる。

そのころには、中国市場が米国市場を追い越して世界最大の市場になっていると予想され、これから20年は先進国が新興国に次から次に追い越されていくという、歴史的にも大きな転換期を目撃することになるのだろう。株式市場は実体経済を反映している鏡のようなものであり、当然国力が反映される場でもある。1989年末の日本の市場は世界の株式市場の約4割を占め、大手銀行の時価総額は世界のトップテンを独占していたものだが、あれから20年、世界は新旧逆転という大きな転換期を迎えている。安全保障も含めて国家のあり方、グローバル経済下での企業経営のあり方など、株式市場が象徴するように、大きく変わらなければ生き残れない時代だし、うまく変化を利用すれば、更なる飛躍も可能になる。経営の腕が問われる時代である。